

第1篇 資本の諸変態とそれらの循環

第3章 商品資本の循環【p128～p148】

$G—W—G'$ の定式は資本の循環を抽象的に示している。この循環は3つの段階に分けられる。

第1章 貨幣資本の循環 $G—W…P…W'—G'$ (第1循環)

【簡単なおさらい】資本家は商品市場に買い手として出現。資本家は貨幣資本Gを商品Wへと転化する。

貨幣は価値の自立的形態である。貨幣資本は資本の貨幣形態である。この購買行動が資本循環の一部分をなすのは

この行為が持つ関連による。つまり購買するのは、利潤をとまって再び販売されるべき新しい商品を生産するためである。このことは購買する商品の特別な使用価値によって可能になる。資本家は生産手段P_mと労働力Aを購買するのであり、貨幣資本Gを生産資本Pへと転化するのである。

第2章 生産資本の循環 $P…W'—G'—W…P$ (第2循環)

【簡単なおさらい】流通過程は中断され、生産資本Pは生産過程で使用される。生産資本は生産手段と労働力からなっているが、生産手段と労働力が常にすでに生産資本であるということは意味しない。資本主義的生産過程の内部でのみ生産資本である。資本主義的生産過程の結果は、新たな商品群である。この商品群は価値増殖した資本の定在形態としての商品資本W'である。

これは元々の商品群Wから質的に異なった消費ということだけでなく販売時にはWよりも高い価値を有している。

商品資本の循環(第3循環)は、資本家が商品資本に売り手として登場することで、流通過程は継続される。

資本家は新しい商品群WをGとの交換で販売する。つまり資本家は商品資本を貨幣資本へと再転化するのであるが、いまやそれは価値増殖した、つまり剰余価値の分だけ大きくなった貨幣資本である。

128 頁 1

商品資本の循環の一般定式は次の如くである。

$$W' \text{ — } G' \text{ — } W \cdots P \cdots W'$$

剰余価値を含む新たな商品（生産物）、等価交換に基づく流通、増殖された貨幣資本、商品（生産物）、流通の中断と価値の増殖過程、生産過程（生産資本）、流通の中断と価値の増殖過程、剰余価値を含む新たな商品（生産物）

一資本にとって $G \text{ — } W$ であるものは他の資本にとっての $W' \text{ — } G'$ を含んでいる。

128 頁 6

たとえば、石炭や機械などは、採炭業者や機械製造業者の商品資本である。

128 頁 7

第 1 循環 $G \cdots G'$ 貨幣資本の最初の反復に際し、既に貨幣資本のこの第 2 循環の完了以前に $P \cdots P$ なる循環のみでなく $W \cdots W$ 商品資本の循環もまた前提されている。

○貨幣資本の循環は資本の価値増殖を典型的に表現するもの。

○上記に対し生産資本の循環は個別資本の再生産の諸条件を示すもの。

○ G も P も既に投下された資本価値を示している。 G は、生産資本の諸形態 P_m と A に転ずるという意味で再生産の可能性を含んでいる。また、 P は既に現実的な生産諸条件の形態をとっているという意味で再生産を表現している。

○貨幣資本の循環も生産資本の循環も、共に個別資本の循環をあらわすものであった。個別資本の循環を代表するのは、循環の出発点としての G と P が共に再生産を開始する態勢を既に採っているからである。

それぞれの資本の循環の内容と様式を規定するものは、出発点にある資本である。従って、貨幣資本の循環も生産資本の循環の場合も循環の外部における他の貨幣資本や商品資本を前提としているにも係わらず循環の出発点としての G と P が共に再生産を開始する態勢にある。

129 頁後 3

商品資本の循環は…商品形態で増加された資本価値をもって開始されるのであり、…剰余価値の循環を含んでいる。 W' 剰余価値を含むあらたな生産物、生産過程で生み出された商品資本により循環が開始され、 W' をもって終わる。 W' は、その機能によって貨幣に、価値増殖された資本 G' に転化されねばならない。そのため再生産を含んでいる。

130 頁

第3循環である商品資本の循環「 $W' - G' - W \cdots P \cdots W'$ 」を特徴づけるのは、増殖された資本価値が展開されるのではなく、むしろ増殖された資本価値が価値増殖の出発点として現れる点にある。

140 頁

○商品資本の循環では W が生産されなければ循環が行われない。この W の大部分は W' として生産されたものである。然るに W' は運動の出発点であり通過点、終点として存在する。

○第1循環の貨幣資本の循環での終点、 G' は W' の転化された形態であり、生産資本の循環の終点 P は G の転化された形態である。

これらの転化はいずれも流通過程における価値の形式的変態であるが、第3循環の終点 W' は P を先行の形態とし、この転化は使用価値と価値の現実的変態である。

それ故に第1循環では買い手の手中にある G' を、第2循環では売り手が持つ A 、 P_m が前提とされるが第3循環では循環外部の貨幣、商品は前提とならない。

141 頁

W' は生産過程そのものの結果としてある。そのため第1循環では G が、第2循環では P が循環の発端、出発点において何物も前提とせず、「歴史的舞台に登場する最初の貨幣資本であり、最初の生産資本である」

143 頁

第3循環では他人の諸商品たる W (A 、 P_m)を前提とせざるをえない。終点にある W' は前の G' 、 P とは異なって流通の継続過程にあり、生産諸要素をなす諸商品に交換されなければならない。

しかも外部の商品市場から $G - W$ によって W を受取る第2の極は循環の終点ではなく、生産の前提としての流通過程の終極である。

すなわち生産資本に転化され、その機能の結果として W' が再び、再度循環の終点を形成する。

言い換えれば終点の W' は直接に他人の貨幣、商品を前提とはしない。 W' は生産過程の直接の結果として、生産過程を再び準備し、商品を循環の再開始にあたって前提とする。

144 頁

このように第3循環は循環内部に $W(A, P_m)$ の形態における他の産業資本を前提としている。だからこの循環は個別資本に共通の一般的運動形態を考察するだけでなく、個別資本の総括であり、社会的総資本を考察する基準を与えている。

146 頁

第3循環は発端からして資本主義的生産の商品形態を示しており $W-G-W$ が目的として現れている。初めから社会的物質代謝を実現する生産的、個人的な消費が包括されている。

第3循環は個別資本の循環を超えて、それ以上の社会的総資本の運動を示す唯一の形態である。但し、これによって社会的総資本の運動そのものの考察が解決されるというものではない。ただその解決の基準が与えられるだけ。

147 頁

第3循環では市場にある商品が生産および再生産過程の不断の前提をなしている。そのためこの形態を固定させると、生産過程のすべての要素を商品流通から生じて商品のみから成っている様に見なす一面的な把握に陥る。

148 頁

商品資本の循環はケネーの経済表の基礎をなすものである。